

アップルパイの午後

尾崎
翠

懶ものうい日曜

兄

妹

友達

兄、机で読んでいる。

妹、向むかい合った机で書いている。

兄 (読んでいた雑誌を投出し、手を伸ばしていきなり妹の頭を打つ)

妹 何。

兄 莫迦。

妹 訳をおっしやいよ。

兄 恥さらし。

妹 訳をおっしゃいてば。

兄 (雑誌を巻いて机を叩く) 何だ、これは。

妹 知らないわ。兄さんが何を読もうとお勝手だわ。兄さんの読書で私の打たれる理由が何処どこにあるのよ。訳をおっしゃい、訳を。

兄 打つ理由があるから打つんだ。(雑誌を投げる) 見ろこれを。醜態のありつたけをさらして。

妹 何なのよ、これが。私の校友会雑誌じゃないの。(語調を変えて) ああ、雪子さんの名文があったでしょう。おめでとう。

兄 名文どころかい、この際に。

妹 そうお。(雑誌を机の抽斗ひきだしにしまいながら) すばらしい月夜の溜息ね。

兄 何が月夜の溜息なんだい。

妹 ほんとに読まないの。夜露に濡れた足があつて——四本よ——、足のぐるりにこおろぎの媾あひびき曳があつて、こおろぎの上になつた二つが一つに続いてしまった肩が落ちてて——月光の妖術で上品な引きのばしよ——、遠景の丘に文化村のだんだんになった灯があつて、その一ばん高いのは月光の抱擁に溶けこんでいて、低いのは夜露に接吻しているの。それで、四本の足は月夜の溜息なのよ。

兄 (てれて) 莫迦。もうすこし人なみな物言いを稽古しろ、代名詞使いめ。お前の言葉と来たら年中謎々なんだ。

妹 私雪子さんの文章をおさらいしただけよ。解わからなきや謎々を解くわ。妹に対しては唐辛子のはいったソオダ水のような男が歩いてるのよ。夜。お揃いで。この男はお揃いだと月光があればなおのこと、お砂糖のすぎたチヨコレエトになってしまうの。そして熟うれすぎた杏子畑の匂いの溜息を吐くの。何もわざわざ説明しなくたって解りきったことだわ。

兄 莫迦まがだな。見せろ、もう一度。

妹 (抽斗を抑えながら)もう一度読んでもう一度ひとの頭を打とうというのね。見せますか。

兄 見せろったら。打たないから。

妹 訳をおっしゃいよ、さっきの。

兄 (抽斗から雑誌を取って貪むさぼり読む)

妹 (雑誌を奪う)何処までチヨコレエトなのよ。ひとを打った理由も言わないで月夜の溜息を読むなんて。訳をおっしゃいてば。私今後は拳骨けんこつ一つだって理由を糺たださずには置かないことよ。お人好くしてればきりがないわ。今までだって理由なくいくつ打ったと思ってるのよ。ちゃんと日記につけてあるから、私、何時いっかは総決算をするつもりよ。

兄 (雑誌を奪う)見ろこれを。(読む)

「私は不幸にも唐辛子のはいったソオダ水のような兄を持っています。そしてこの四月からソオダ水と一緒に暮らさなければならなくなりました。この意味では私がこの学校に入学したことは大きい不幸です。兄の癩癩かんしゃくは手近に一つの頭を必要とします。そして

その頭を打つか、鬚まげをつかんでおさげにするか、二つの方法によって鎮まることが出来ます。私ははじめヘアネットを使いました。けれどネットはおさげの防禦としてはそう役立ちませんし、遅くも三日目には新あたらしいのと取換えなければなりません。私の参考書はネットに侵されてしまいました。それで私は髪を切りました。私の机に実験心理学や邦訳つきナショナルや言語学概論が栞まれたのは、私の髯が失くなった後のことです。私の断髪は事情の切迫からで、はやりからではありません。」莫迦。何だって堂々と「変態趣味からです」と書かないんだ。

妹 変態趣味。何なのよ、それは。

兄 自分の趣味を考えてみる。趣味だけならまだしも、お前のこととききたら何もかもに変態という字を冠せて丁度なんだ。変態感情。変態感覚。変態性……

妹 何が、何が変態感情なのよ。好いかげん汚ない名を並べて。何処がどんなんだか説明なさいよ。

兄 説明の代りに次を読んでやるよ。これが何よりの説明なんだ。「私はあと一ヶ月かからなければ言語学の遅れを取返すことが出来ません。言語学は塩もお砂糖もない学問です。考えながら歩いてきた詩人が煉瓦塀につき当って鼻眼鏡をこわしたとしたら、彼は自身が足と同時に頭を働かしていたことに腹を立てるより、煉瓦塀に腹を立てるはずです」ふん。僕が作文の先生だったら、「火星きてのへぼ詩人だってこんな文章は書かないはずですよ」と評を入れて突返してやるよ。

言語学と詩人の煉瓦塀とどうつながりがつくというんだ。

妹 私がその作文の先生の先生だったら、

「聯想の飛躍を知らざる者に死あれ」と書くまでよ。

兄

それくらいなことは平気で書いてるさ。(読む)「桑木博士の哲学概論ほか三、四はまだ買えませんが、神田の古本の予算を立てています。哲学は思ったより愛嬌のある横顔をしています。塩と砂糖でかくし化粧をしています。正面の胡椒粉こしょうこはこな白粉おしろいにすぎません。煉瓦堀で眼鏡をこわした詩人は、こんどは新調の鼻眼鏡の中ですこし眼を細めました。今彼の眼鏡の前にある横顔がかくした化粧のためとはいえ案外美人だったからでしょう。しかし私は相変らず惨めです。何時揃うか解らない私の古本参考書は、日光消毒に日曜を四つつぶさなければならぬペエチ数を持っています。そして、そして、断髪は私の打たれる防禦までは兼ねてくれません。私の兄は髯のなくなった頭をも打たずにはいられない潤癖もち……」見ろ、恥さらし。僕の名誉はどうなるんだ。

妹

野蛮人に名誉がありますか。

兄

いったいどっちが野蛮人なんだい、雑誌に発表する作文に、私、兄、なんて言葉を使う奴と、それを打たずにはいられない方と。

妹

無論打つ方が野蛮人よ。それに私ほんこのことを書いたまでだわ。兄さんのふだんがふだんだからこんな作文にもなるのよ。

兄

お前が打つだけの原因を与えるから打つんだ。すこしでも妹なみな妹だったら誰が好んで打つものか。それに何だい、白粉の名前も知らないくせに哲学の化粧法なんか書いて。

妹

知っていますよ。ナハチガル化粧液の匂いだって知っていますよ。

兄 だから変態感覚だと言うんだよ。恋ぬきで詩人の修業を試みたり、机の上で哲学の横顔をぬすみ見したり。确实なのは経験なんだ莫迦。

妹 また循環だわ。幾度繰返したら好いのよ。経験のお説教だってちゃんと日記につけてあるから。

兄 千度でもつけろ。

妹 何のためにつけてあると思ってるのよ。こんど国へ行ったらお父さんに見せるためですよ。

兄 勝手に見せたら好いじゃないか。おかつぱと一緒に見てもらったら好いだろう。

妹 月夜の溜息も一緒だということを忘れないで頂戴。(机に向かって書き始める)

兄 いったいお前は何しに東京まで来たんだ。

妹 勉強しに来たんです。兄さんに打たれるためじゃありません。

兄 (ペンを奪う)莫迦。何が勉強なんだ、兄に反抗することはかり覚えて。いったいお前くらい男に似た女はないぞ。頭を切ったり、青い靴下をはいたり。襟頸ときたらバリカンの跡で蒼くなっていて、その下が栗つかすのような肌の粗い頸なんだ。その下がにこりもしない洋服の衿だ。のどぼとけはとび出しているし、肩は骨でこちこちなんだ。見ろ、青い靴下の中味を。何処に女らしい丸みがあるんだ。牛蒡ごぼうの茎こだってお前の足より柔らかくないじゃないか。

妹 薊あざみの花だってお前より四倍も女らしい。——解りきったことお止しなさい。

兄 いったい女が三週間に一度ずつ床屋に通いだしたらおしまいだよ。

妹 ネットを破いたのは誰なのよ。ネットの数だって日記につけてありますよ。

兄 千度でもつけろ。お前が小間物屋に行くのはネットを買う時ぐらいのものさ。

妹 (兄の口調で) 僕だって一週に一度ずつは行く。(自分の調子に還り) 雪子さんはライラック水の空瓶を一つも捨てないでしまつて。毎週のを日附入りで。鏡台の抽斗に入りきらなくなったってこぼしてたわ。それから先週のナハチガル化粧液はライラックよりよい月夜の溜息に近い匂いなんですって。独逸ものだけに深刻で。こんどの号には「ウエルネル、クラウドスの厚味とナハチガル液の芳香」という論文を書くんですって。(別なペンで書き始める)

兄 ああ。僕はこの妹のためにどれだけ生活を乱されたら好いのだ。いよいよ手紙だ。親父に迎いに来させるんだ。僕はこれ以上の方策を考へることが出来ない。

妹 お書きなさいとも。お父さんに来てもらえば私だって好いわ。私だってこれ以上打たれていなくなつて好いわ。お茶の出し方がまずいってば打つし、電気の笠にほこりが溜まつたつてば打つし何処にこの年して頭を打たれる妹があるのよ。元来別々に下宿するんだつたわ。兄さんがどんなに野蛮かつてことは小さい時から十分承知してて一緒に住むなんて、私自身のお人よしが嫌になつてしまつたわ。

兄 お前をすこしでも女に近づけろって親父に押つけられたから僕だってこんな不愉快な日を忍んでいるんだ。好んで一緒にいるかい。にも拘らず頭は勝手に切る、指のペンだこは大きくする。何処に手のつけようがあるんだ。(ペンをつきつける)第一この万年筆を見ろ。男の僕だって五分間も書いていたら手がだるくなりそうな男持ちじゃないか。銀行屋の出来損スヘいめ。これがお前の好みというものなのだ。無細工で、バスで、塩っからくて、衿頸そっくりなんだ。だから哲学の化粧法も論じなくなるんだ。

妹 目方を磁ってごらんさいよ。細い軸に銀のすすきの穂が絡まっているのと、これと、どっちが重いか。

兄 そんな女らしい持物があるんなら出してみる。目の前で旦那でやるから。

妹 ライラックの空瓶の部屋に行つてなさい。それまでこの男持ちのも貸してあげるから。いったい何だって今日はぐずぐずしているのよ。日曜ですよ。(腕時計をみて)定刻を過ぎていますよ。

兄 他の知ったことかい。(腕時計を見ていらいらと部屋を歩く)

妹 早く行って頂戴ちやうだいてば。勉強も出来やしないわ。一週一度の静かな半日が台なしだわ。

兄 ご都合通りに行くかい。今日は改めて意見することがあるんだ。

妹 私もう我慢ならぬわ。すぐお父さんに来てもらつて下宿するから。

兄 虫の好いことを言うな。こんでこそ親父に来てもらって国に引込ませるんだ。頭でも伸ばしてさっさと嫁に行っちゃまえ。元来お前は一族中の型破りなんだ。二十にもなって嫁に行かない女が一族中の何処にいるんだ。お花叔母さんは十六で嫁に行つて十七でお母さんになった――

妹 (兄の口調で) 貞子は十八でりっぱな細君になった。

兄 二十三の忠太君が十九の芳子と婚約したし、何処に姥捨山なんかうろついている女があるんだ。いったい二十にならないまでに嫁に行くのが僕たち一族の女性の誇りなんだ。おかめ坂の上り下りで足を棒にしたやつがあるかい。まだ十五の邦子だつてお前ほど乾燥した頸を持ってやしないんだ。

妹 そうですとも。あの頸は白粉漬けですよ。

兄 お前も国へ帰つて白粉の選択くらいは出来る修業をしろというんだ。

妹 (抽斗から頼信紙らいしんしを出して書く)

兄 (腕時計を見ながらいらいらと歩きまわる)

妹 (頼信紙を持って出て行くこととする)

兄 何処へ行くんだ。まだ話は済んでないのだぞ。(頼信紙に気づく) 誰に電報を打つんだ。

妹 他の知ったことですか。

兄 だしぬくつもりだな。(頼信紙を奪って読む) 莫迦、莫迦。何だこれは。何時僕が発狂したんだ、何時。

妹 その通り気がいじやないの。

兄 きさまこそ気がい病院に行けば好いんだ。(頼信紙を掴つかんで捨てる) 忪こらえてたってきりが無い。僕は断行する。(頼信紙に書き、出て行こうとする)

妹 (頼信紙を奪って読む) いつ、いつ私が発狂したのよお。

兄 現在さ。乾燥狂で貧血性ヒステリイなんだ。

妹 (頼信紙を掴んで捨てる) 何なのよ、その貧血性ヒ、口にするのもいやな病名だわ。

兄 貧血性ヒステリイさ。解らなければ幾度でも教えてやるよ。

妹 何の根拠があれば私にそんな病名を被せれるのか説明なさい、説明を。

兄 心臓に手を置いて考えてみる。お前の心臓ときたら血液どころか水だってありやしないから。いったいお前は二十歳の今日まで誰に、誰に恋をしたことがあるんだ。どんな女だって二十歳までもし独りでしたら、心臓に二つや三つの孔あなはあいてるんだ。これがほんと

の女なんだ。ところがお前のときたらかすり傷一つないじゃないか。だからのどぼとけがとび出してくるんだ。男、女。男、女。男、女。これが健全な世界の正体なんだ。お前なんか桁はずれの、存在理由なしなんだ。

妹 螺旋狂の男ヒス。(机に向かつて書く)

兄 桁を外したのが何と言ったってかまうものか。(歩きながら)だから男も女も存在理由を獲得するには恋なんだ。リイベ、こい、ラヴ。何処の国だってだからこの事実には美しい言葉を当てているんだ。お前の青靴下と正反対な美しい言葉を。(足許を覗いてゆくり歩きながら、だんだん独語的になる) 詩を作るより恋をしろ、だ。哲学の横顔よりリイベの音に酔うんだ。こい。ラヴ。リイベ——。(急に妹の書いているのに気づき)また電報を書いているのか。断じて電報は打たせないよ。

妹 やかましいわね。すこし静かになりかかったと思ったら。(頼信紙を全部投げ出して) 書きたければ幾枚でもお書きなさい。(書きつづける)

兄 (歩きながら)だからお前が人間として存在して行くには、やはり恋なんだ。聞いているのか。(妹の机の側に来る)何を書いているんだ。恋をしろと言っただよ。

妹 (書いていた紙を伏せて)誰に言ってるの。

兄 お前自身に言ってるんだ。こい、を、し、ろ。

妹　いまに月夜の溜息を吐くわよ。どいて頂戴、私忙がしいのだから。何だって今日は三時にもなるのに出かけないのよ。雪子さんが存在理由を失くするわ。他のおせつかいはたくさんよ。(書く)

兄　(腕時計を見ていらいと歩きまわる)親父もお母さんも貧血性ヒステリーの治るのばかり待ってるんだ。今から恋を始めれば頭を切ったことでそうお母さんを悲しませないで済むんだ。遅くはないよ。(時計を見る。目立っていらいらする)聞いているのか。(妹の側に来る)何を書いているんだいったい。

妹　(紙を伏せる)忙しいんですけどば。

兄　原稿紙だな。また校友会雑誌に恥さらしをしようというのか。見せろ。

妹　(紙を庇う)そうじゃないのよお。

兄　見せろ、ともかく。今後原稿紙に書いた字は一行だって僕の検閲を経なければならぬんだ。

妹　原稿じゃないんですけどば。

兄　何しろ僕の名誉のために検閲の必要があるよ。(紙を取る)「だってきまりが悪かったんですもの。でもお怒りになっちゃいやよ」何だいこれは。お前の作文にしちゃおらしすぎるぜ。

妹　返して頂戴てば。

兄 (黙読して) へええ。誰の作品なんだい、これは。

妹 一葉全集の写しなのよ。返して頂戴せば、急ぐのだから。

兄 (妹を遮りながら) 面白いな、女らしくて。「でも今日いらして下さらないのはお怒りになったからじゃなくて。もう一時すぎたんですもの。私おひる前から不安で、おひるは御飯を一つしか食べませんでした。それで、惨めな気もちでこの手紙を書いてたら、ソオダ水がいきなりひとの頭を打ちましたの。たださえ惨めな物思いで一ばいの頭を」何だ、今日のお前の記録じゃないか。

妹 そうよ、ほんとは私の手紙。

兄 お前の手紙。それじゃお前は恋をしてるのか、え、恋を。誰がこの手紙の受取り手なんだ。僕は嬉しいよ。話してくれ。

妹 でも、受取り手のない手紙なの。

兄 隠さなくて好いよ。僕は時々は癩癩もちだけど、こんな時には好い聴き手になるよ。

妹 ただね、私、女としてあまり殺風景だから、こんな手紙の作文を書いて女らしい気持を味わおうと思ったの。

兄 そうか。しかし悪い傾向じゃないよ。そんな心がけなら今に受取り手が出来るよ。そしたら衿頸だって美しくなって来るんだ。人工で乾燥さしてるだけで、元来はそうみっともない頸じゃないのだから。

妹 兄さんてば一しんに書いてる最中に、いきなりひとの頭を打つんですもの。

兄 済まなかったよ。僕の悪い癖なんだ。(手紙をとびとびに読む)「あの時、私がちょっとときまり悪^{わる}るがったために、もうアップルパイにも逢えないかと思って、私悲しいんですの」本物とすこしも違わない気分が出てるよ。お前だってこれだけ書けるんだ。惜しいなこれに受取り手がないなんて。——松村に出してみたらどうだい。松村ほど適任者はないよ。兄妹だけあって横顔が雪子さんにそっくりなんだ。隣り合って講義を聴いてると、講堂にいることを忘れるよ。

妹 そうね。私だって雪子さんと並んで講義を聴いてると、講堂の気分じゃない、かも知れないわ、未来のことだけれど。

兄 そうなるのがほんとだよ。それに、今のアップルパイで思い出したけど、松村もお前と同じアップルパイが好きなんだ、濃いお茶で。

妹 そうお。(手紙を折りながら)ともかくこれから時々お稽古するわ。(時計を見る)

兄 それで初めて目的感に添うんだ。(時計を見る)

友達が這入って来る。菓子の包みを持っている。兄、友達に何か言おうとして口籠り、蒼くなって立っている。

妹 いらしたわ、やはり。(友達の手を取り、机の側につれて来る)怒っていらっしやらないのね。(菓子の包みを取る)アップルパイ、怒らなかつたのね。

友達 (兄を気にしながら)何を怒らなかつたんです。アップルパイがどうしたんですか。僕は小野君に用事があつて——

兄 雪子さんは何と言つたのだ。早く聞かしてくれ。どっちにしたって運命なら、僕は——

妹 そうじゃないのよ兄さん。お稽古なのよ。(友達に手紙を渡しながら)大丈夫よお稽古なんだから。兄さんが恋の稽古をしろって言うてるところに丁度あなたがいらしたんですもの。早く読んで頂戴。私いま速達で出すところだったの。

友達 (まだ兄を気にする)

兄 どっちなんだ雪子さんの言葉は。

妹 (兄に)お稽古なのよ。(友達に) 早く読んで頂戴。

友達 (手紙を読み始める)

兄 どっちなんだ雪子さんの返事は。

友達 (手紙から眼をはなさない)

妹 私今朝から初めておなががすいたわ。(包みを解く)やはりアップルパイね。(兄に)お稽古よ、兄さん。

兄 勝手に稽古しろ。(友達に)どっちなんだ。

友達 (漸く手紙から眼をはなす)妹がね、忘れるところだった、お待ちしていますと言ったよ。

兄 来いって。雪子さんが、僕に、来いって言ったんだね。

友達 「お待ちしています」

兄 間ちがないね、「お待ちしています」だね。

友達 間ちがないく。

兄 そうか。「お待ちしています」。僕は——電報を打つんだ。(頼信紙の一枚を拾って書く。一字ずつ切りながら読む)コンヤクシタスグキテクレ。間違いはないかよく聴いてくれ。幸福すぎる時は妙なことを書くものだから。コンヤクシタ。スグキテクレ。

友達 何のことだいそれは。

兄 僕が婚約したんだ、雪子さんと。君が承諾の使者なんだ。

友達 ただ「お待ちしています」だよ。

兄 暗号なんだ僕たちの。僕は先週の丁度今日雪子さんに申込みをしたんだ。お待ちしています、承諾。太陽は沈みました、拒絶。そのどっちかを持って今日君が来ること。僕たちの打合せは素朴なんだ。僕はこの一週間、さっきまで、婚約と失恋の中を泳がされたけれど。(急に立上って入口に行く)

妹 お待ちなさいよ。今電報を打ってどうするの。

兄 親父を来させて結婚するんだ。

妹 惜しいわ。月夜の溜息が一つ減ってしまうんですもの。

兄 松村とお前で埋めたら好いだろう。お稽古でなく本物で。

妹 松村、妹を娘捨山から狩り出してくれ。男くさい衿頸を君の接吻で洗ってくれ。お稽古でなく本物で。(出て行く)

妹 (お茶の支度のために部屋を出入りした後) 駄目ね。湯わかしのお湯がみんな発ってしまったわ。お午ひるからずっと懸けてたんですもの。すこし待ってね。

友達 お茶なんかどうだって好いから、おかけなさい。

妹 でもお茶が濃いほどあなたはやさしくなるんですもの。(パイを切る)

友達 (パイを舐なめながら)パイだけの方が好い。お茶に酔うとまたお口を拝借したくなるから。

妹 (パイを祇なめながら)まだ怒っていらっしやるの。手紙にあんなに書いたのに。

友達 「だってきまりが悪かったんですもの」か。だからお茶は入れないで下さい。

妹 この手紙なんて先週のことよ。(立上る)またお湯が発ってしまうわ。

友達 お湯なんか勝手に発たしておけば好い。僕はもう濃い奴を飲んだ気もちになっちゃったんです。

妹 (反射的に手巾を出して口辺を拭く)

友達 (性急に)そのまま。何て惜しいことをするんです。甘いほど好んだ。